

わが家の防災生活

活動場所：家庭科室

11月2日（月） 11：20～12：25

提案者 大岩 恭子

1 活動のねらい

災害時の生活への備えや日常生活における防災の工夫について試したり考えたりする活動を通して、家庭生活を見つめたり、災害への備えについて仲間と交流したりしながら、よりよい生活についての自分の考えをつくる。

2 活動設定の意図

日本では、近年、地震や台風、豪雨などの自然災害が頻発しており、甚大な被害をもたらしている。「自助」「共助」「公助」の重要性が求められ、防災の充実が再認識されている。一般的に「防災」というと、非常時のいざというときの特別のものという考えであることが多い。しかし、近年、災害への備えの考え方が様々に変わってきている。防災は普段の生活とかけ離れた非日常のものではなく、日常の延長線上にあり、生活の中に位置づけられるものであるという考え方も生まれている。「ローリングストック法」という日常的に非常食を備え、食べたら買い足すという行為を繰り返し、常に家庭に新しい非常食を備蓄し、災害の備えを日常生活の中に位置づけるという考え方も浸透してきている。

本活動では、災害時の生活への備えや工夫について試したり考えたりする。活動の入口として、子どもは、非常用持ち出し袋の中身について考える。何が必要か考えることで、家族の嗜好や家族構成など、家庭生活を見つめていく。その非常用持ち出し袋の置き場所や実際に避難する動線を考えることで、住まい方や住環境にも目を向けていく。また、ライフラインが復旧していない災害時の状況を思い描きながら活動することによって、子どもは、日常、自分が何気なくしている行為に目を向け、日常の行為の意味や価値について考えたり、環境や持続可能な社会の構築の視点から自分の生活を見つめたりすると考える。実際に避難する際の行動や避難所での生活について思い描いた子どもは、地域の人とのつながりや、防災という視点からまちづくりについて目を向けていくであろう。

このように、子どもは、災害時の備えを考えることで、家庭生活や地域とのつながりを見つめたり、生活における行為の意味や価値を考えたりしながら、防災の視点から生活事象を総合的に見つめていくのである。

3 子どもの「問い」が立ちあがる環境

○ 災害時の備えから家庭生活を見つめる

災害時の備えについて考えることは、家族構成や嗜好、普段の生活様式など家庭生活を見つめたり、住まい方や地域とのつながりに目を向けたりすることになると考える。また、災害時を思い描きながら活動することで、家庭生活における自分の行為に目を向け、それらの意味や価値を見つめることにつながると考える。

○ 災害への備えについて仲間と交流する

災害時の備えについては、乳幼児や高齢者がいる家庭はおむつや介護用品などが必要である。食料については家族の嗜好や避難場所の状況など、それぞれの家族構成や環境等を考慮して様々な備えの必要がある。子どもは、災害時の備えについて仲間と試したり考えたりする中で、互いの価値観や家族構成などの違いに気づき、それぞれの備えの違いから、家族や生活についてさらに見つめていく。また、避難する際の行動や避難場所での生活を思い描いたりする中で、声をかけ合ったり助け合ったりすることの意味や価値にも目を向け、地域の人とのつながりについても考えていく。

「わが家の防災生活」(全22M)

第1次 わが家の防災(18M)

- ・非常用持ち出し袋に入れる物を考える。
- ・過去の災害や被災者の声から災害時の生活を思い描く
- ・災害時の生活の備えや衣食住生活における防災の工夫について試したり考えたりする(本時)
- ・ハザードマップからわが家の防災について見つめる

第2次 わがまちの防災(4M)

- ・防災の視点からまちづくりを見つめる

4 対象とかかわる子ども

子どもは、非常用持ち出し袋の中に入れる物を考えた。何を入れてよいのか迷ったり悩んだりしたことから、防災に対するこれまでの意識の低さや備えの必要性を感じた。そこで、災害の映像や被災者の声からその状況や生活を思い描いた。過去の災害の資料から、災害時の状況を思い描いた子どもは、非常用持ち出し袋の置き場所を考える中で、部屋の家具の配置や実際に避難する動線など、安全な住まい方についても目を向けた。

食料の備えとしては、長期保存ができてすぐに食べられる非常食として「乾パン」と「アルファ米」を食

べてみた。美味しさもあるが、それだけで食べると水分を欲することや、おかずがある方が食べやすいことなど、主に味や食べやすさの面から見つめていた。過去の災害の資料や被災者の声からは、災害時には野菜不足になって栄養が偏る傾向にあることや、そのために体調を崩す人がいることなどを知った。そこで、子どもは、野菜不足を解消するために、野菜ジュースやフルーツ缶でビタミンを摂取したり、昔ながらの保存食である乾物を生かしたりしてはどうかと考えた。その栄養価や長期保存できるよさに着目し、栄養面や保存性にも目を向けていった。そして、災害時にこれまで考えてきた食料で対応できるかどうか、実際に調理をしてみた。調理の体験を通して、温かい食事が気持ちも明るくすることや普段食べ慣れているものが口に合うこと、嗜好性、食品の組み合わせ、節水の工夫、食料の分量、調理や調理器具の知識や技能の必要性など、災害食の要件として新たな観点も見出している。

5 本時の構想・展開

(1) 本時のねらい

非常用持ち出し袋に入れる災害時の食の備えを考えることを通して、家族の嗜好や日常の備蓄品などから家庭生活を見つめ直したり、仲間と交流したりしながら、備えの視点からわが家の生活について考える。

(2) 本時の構想

(3) 本時の展開 15・16M/全22M(65分)

時間	番号;子どもの活動 ・ ;子どもの姿	○ ;教師の手立て
20	<p>1 これまでの活動を振り返り、災害時の食事で大事なことを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・水が貴重だから、節水の工夫が必要だと思う。 ・食料が余ったり、足りなくなったりしないように、分量を考えて作ることが大切だと思う。 ・災害時でも好みのもや食べ慣れたものが食べられると、気持ちが少しでも明るくなると思う。 	<p>○これまでの活動の写真を提示し、体験したことや考えたことを思い起こすことができるようにする。</p> <p>○動画を用意し、実際に避難する場面を想起しやすくする。</p>
35	<p>2 非常用持ち出し袋に入れる災害時の食の備えを考える。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・すぐに食べられそうな乾パンがあるといい。 ・自分の家族は甘いものが好みだから、それを入れたらいいと思う。 ・家は家族が多いからたくさんの食料が必要だと思う。 ・考えたもの全ては入らないのではないかと試す。 ・家の備蓄品をもっと確かめたいと思う。 	<p>○実物や写真を用意し、体験や日常生活を想起しやすくする。</p> <p>○リュックを用意し、必要に応じて実際に背負って確かめられるようにする。</p> <p>○必要に応じて最初に考えた災害時の食事のカードを提示し、自分の考えの変容に気付けるようにする。</p>
10	<p>3 本時を振り返る。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・家族や家庭生活を見つめ直し、わが家の防災生活について考えたことを書く。 	

○ 非常用持ち出し袋に入れる災害時の食の備えを考える

子どもは、これまでの活動や日常生活から、栄養面や衛生面、調理器具、調理に対する知識や技能などそれぞれの観点から災害時の食に必要なものについて考えてきている。本時の前半、それらについて共有することで、非常用持ち出し袋に入れるものを考える際の観点となると考える。

非常用持ち出し袋に入れるものを考える中で、自分や家族の嗜好、普段食べ慣れている物、家庭に備蓄している物など、家庭生活を見つめ直すことにつながる。食料はたくさんあればある程よいが、実際に避難する場面を想起すると、重さも考慮しなければならないことに気付くであろう。そうしたときに、優先順位を考えて取捨選択することも必要である。また、二次避難等で自宅に戻れた場合を想定すると、長期的になると備蓄品はさらにあつた方がよい。その点に着眼すると「ローリングストック法」の考え方で日常的な備蓄の必要性に目を向けるであろう。また、災害発生時からの時間軸(フェーズ)も考慮しながら考えることも必要になってくるであろう。

本時を通して、家族や家庭生活を見つめ直しながら、わが家の備えについて考える姿を期待する。

6 活動の振り返り

(1) 自分の生活を見つめ始める

本活動の入口として、非常用持ち出し袋に入れるものについて考えた。子どもは、「災害への備えは大切だと思うけれど、実際に考えてみると何をどう準備したらよいか分からない」と自分自身の災害への意識の低さを自覚したり、災害への備えをしていない自分の生活を見つめたりした。

晴美さんは「今日、家庭科の勉強をして、家の防災リュックの中身を確認したくなりました。私の家ではお母さんやお父さんが防災リュックを管理しています。だから、まじまじと中身を確認したことはありませんでした。今回、何を入れるか考えて『あれは入っているのかな』と気になりました。家の防災リュックの中身を見たいです」と自分の生活を見つめ始めた。

(2) 活動の核となる非常用持ち出し袋

家庭科の対象は生活事象、つまり生活そのものである。本活動を通して、防災・減災の視点から生活事象を総合的にとらえてほしいという思いがあった。しかしながら、生活事象は複雑に絡み合っている。そこで、活動の核となり、子どもの思考のよりどころとなるものが必要であると考えた。本活動ではそれを非常用持ち出し袋とした。

活動の入口で非常用持ち出し袋の中身について考えた子どもは、過去の災害の資料や被災者の方々の声から災害時の食事の課題について見つめていった。そして、災害時には野菜不足になって栄養バランスに偏りが生じることや、普段食べ慣れているものが気持ちを落ち着かせることにつながるなどを知った。また、災害食の調理の体験を通して、ラップを用いることで節水につながることも衛生面が担保されることや、温かい食事の意味や価値について考えていった。

それらの活動の過程で、晴美さんは非常用持ち出し袋に入れるものを考え続けていた。被災者の方々の声や友だちの考えから非常用持ち出し袋に入れるものを保存性の観点から考え直したり、家族の嗜好を知ろうと実際に尋ねたりしながら考え続けていた。前時、晴美さんは「授業の影響で、家族の話題に『災害』という言葉が出てくるようになりました。食事についても意見を聞

いてみたいです」と振り返った。そして、後日、「お父さんに非常用持ち出し袋に入れる缶詰について聞いてみたら、『サバ缶』って言っていた。お父さんが好きみたい。袋の中に入れようかな」と語った。晴美さんは、非常用持ち出し袋に入れるものを考える過程で、栄養面や保存性、食事の役割など、家庭科の「健康・快適・安全」の見方・考え方をはたらかせながら、わが家の防災生活について見つめていた。

(3) 災害時の食事で大切なことを思考する中で

子どもは、前時までに過去の災害の資料や被災者の方々の声、実際に災害食を調理した体験から、災害時の食事で大切なことについて考えてきた。本時の前半では、これまでの活動を振り返って、それらを共有する時間を設けた。

淳さんは乾パンを食べた体験から「乾パンは固い。僕たちはいいけれどお年寄りには食べづらい。だから、いろんな年齢の人も食べられるものがよいと思う」と語った。視点を自分自身から他者へとひろげていった。

優子さんは「避難所では調理できないかもしれないから、簡単に食べられるものがよいと思う」と語った。それに対して、一樹さんは「家庭科室がない避難所もある」とつぶやいた。それを聞いていた淳さんは「家庭科室のように調理できる場所があっても、そもそもライフラインがストップしている可能性もある」と話した。



子どもは、災害時の食事で大切なことを考える中で、これまでに得た知識や体験、生活経験からつくられてきた生活の営みに係る見方・考え方をはたらかせながら思考していた。

本時の中盤、尚さんは「協力が大切だと思う。避難所では自分たちだけでは解決できないこともあるだろうから」と語った。災害食作りの際、自分一人では上手くできなかったことも友だちと協力することで解決できたという体験が基に

なっているという。それを聞いた雅弘さんや一樹さんは「協力することは災害の時だけではなく、日頃から大切なことだと思うよ」と語り始めた。一樹さんは「だけど、最近はみんな忙しくて近所付き合いが減ってきている現状があると聞いたことがあるけれど…。でも、近所の人との協力は大切だよ」と付け加えた。尚さんや雅弘さん、一樹さんは、家庭科の「協力・協働」の視点から考えている姿であった。

淳さんは道具にも目を向けていった。生活経験や災害食作りの体験から、プルタブを引いて開ける方式の缶詰が手軽に開けられるとともに、缶切りが不要なため、適しているのではないかと考えたのである。子どもは友だちの考えを聞きながら、次第に、非常用持ち出し袋の中に入れる具体的なものについて思考し始めていった。

(4) 家族や家庭生活を見つめて

本時の後半、前半で共有したことを生かして、「非常用持ち出し袋に入れる災害時の食事に必要なもの」について具体的に考えた。

栄養面や保存性から考える子ども、衛生面からラップやビニール袋を加える子ども、家族の嗜好を考慮しながら考える子どもなど、様々であった。実際に家庭にある非常用持ち出し袋を持参した遙香さんは、持参した袋に入っているものをみんなに紹介した。遙香さんは活動の過程で、家庭にある非常用持ち出し袋を見つめ直し、新たに付け加えたものがあると語った。それは「ラップ」と「フルーツ缶」であった。その理由について尋ねると「災害食作りのときに、食器にラップを被せたら水を使わなくても後片付けができた。それに寒さ対策にもなるから」「フルーツ缶は、野菜と同じでビタミンが摂れるし、同じ味ばかりだと飽きると思うから」と語った。



家庭に備蓄したものには賞味期限があることに気付いた一樹さんは、「期限が切れる前に食べて、また買い足すと、備えにもなるし、食べ慣れることにもなると思う」と語り、「ローリングスト

ック法」の考え方で家庭生活を見つめていた。

さらに、非常用持ち出し袋を家族で一人一つずつ用意している秀夫さんは、「僕の家は家族で分担しています」とみんなに紹介した（下記）。

- ・お父さん…水や道具などの重いもの中心
- ・お母さん…食事に関するもの
- ・お姉ちゃん…乾物などの軽いもの
- ・僕…おかし

秀夫さんの家庭の備えを聞いた子どもは「なるほど」と納得したり、自分の家庭の備えについて見つめ直したりした。晴美さんは友だちの考えを聞き、本時の活動を以下のように振り返った。

今日の授業で、自分はあまり家族のことを考えていないと思いました。非常用持ち出し袋はお父さんに任せっきりで、自分は手ぶらで逃げることを考えていたからです。今までは小さかったので許される年齢でしたが、そろそろ自分のことは自分で守るために袋をもう一つつくるのもいいと思いました。その分、持って行けるものも増えるので、家族に話してみようと思います。

晴美さんの姿は、防災・減災の視点から自分の家族や家庭生活を見つめ直し、家庭生活をよりよくつくり変えようとしている姿だととらえた。

(5) 子どもの学びの道筋を大事に

「この前、スーパーに行ったときに缶詰コーナーで立ち止まって見ちゃった。今までは通り過ぎていたのに」と話してくれた一樹さん。生活事象に対する見方・考え方が少しずつ変わってきている。

子どもの学びは、一時間の活動の中で「こうしたら、こうなる」というような定型化されたものではない。子どもの行為の変容を性急に求めるのではなく、子ども一人一人の学びの道筋を丁寧に見つめることが肝要であることを痛感した。また、教師の道筋ではなく、子どもの学びの道筋を大事に、同じ歩調で一緒に活動をつくっていく真摯な姿勢を忘れてはならないことを再確認した。

〈メールにて本活動に関するご質問、ご意見、ご感想をお寄せください〉

提案者連絡先：okyoko@juen.ac.jp（大岩恭子）